法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<卒論>絵本論 ： 桃太郎を中心に昔話絵本を考える

著者	坂野 陽子
雑誌名	日本文學誌要
巻	50
ページ	142-151
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019775

絵本論

――桃太郎を中心に昔話絵本を考える――

坂野陽子

近年の絵本をとりまく状況として、第一に読者層が子供から大人まで広がったこと。第二に取り扱う内容が多様化し、しかけ絵本や写真絵本など表現方法に変化がみられたこと。第三に子供が絵本を読む機会が減り、図書館に通う子が減少したこと。第四に翻訳絵本や昔話絵本の出版数が増加したことが挙げられる。全体的にみてみると、出版数・出版社が近年の絵本ブームによって大幅な増大をみせ、出版界では大激戦が繰り広げられている。

しかし、実際書店に並ぶ絵本を手にとってみると、外見が派手だが内容に乏しく、テーマが伝わりにくいもの、異常なまでに文字数の少ないもの、擬音語が頻繁に使われており、そればかりが目立つもの、絵がマンガチックなものなどを数多くみかける。殊に翻訳絵本・昔話絵本に関しては、話の省略が多く、テーマが変質してしまっているものが多いのだ。なぜこの様な事になってしまったのであろう？　子供の頃、母の温かいぬくもりに安心しながら胸を踊らせてきいた昔話は、絵本化によって変貌を遂げざる得ないのであろうか？

そこで本稿では桃太郎を中心に昔話絵本化の歴史を遡る事を通して、児童文学界・絵本界が抱えている問題点、そしてよい昔話絵本とはどんなものなのかを考えてみたいと思う。

一、桃太郎めぐり

〔1〕江戸期に於ける桃太郎

桃太郎が、絵入りの本に初めて登場し、そして活躍した場は、江戸中期から庶民の間で流行した「草双紙」の中でである。藤田秀素筆・奥村政信版による『むかしむかしの桃太郎』(注1)を筆頭に草双紙類の「桃太郎噺」は現在八十種以上のものがみつかっており、当時の桃太郎人気が伺える。

草双紙の中での桃太郎噺は、子供のいない爺と婆が桃を拾い、桃太郎がうまれ成長し、犬・猿・雉子をお伴に鬼退治に出かけ、無事帰って来るという大筋を基に、いろいろの脚色がすでにこの頃から

されており多種多様の桃太郎が存在している。片手で大石を持ち上げる『桃太郎昔語』(注2)の他、産湯の盥をひっくり返す『桃太郎誉家土産』(注3)、ユニークなものになると桃太郎が村角力の大関になったり米俵を持ち上げる『桃太郎一代記』(注4)などが書かれており、作家の脚色の度合いによって様々であるが、この背景には、強者こそが天下をおさめる弱肉強食の戦国時代においての、肉体的な「力」・うまれもった神秘的な「力」に対する憧れと願望が強く込められているように感じる。このような作品の脚色は単に話に面白さ・華やかさを与えるだけでなく、そこからその時代の理想像を桃太郎の姿にかいまみることが出来るのだ。また、『桃太郎一代記』のように奪ってきた宝物を朝廷に献上したり、赤本『桃太郎昔咄』での川に洗濯にいったお婆さんが「みづの流れと人の果報とはさりとはさりとは知れぬものぢゃ」(注5)と呟く場面や『桃太郎昔日記』(注6)のように神仏に願をかけて大力を授かる場面〔資料1〕などに、当時の江戸庶民の生活観・宗教観を伺うことができる。

このように、貧しく寂しかった爺婆の家に突然桃太郎がうまれてきて、最後には豊かで幸せな生活を象徴する金・銀・宝・名誉を手に入れる桃太郎話は、常に現状に満足する事なく何らかの変化を求め続ける人々の心をうって急速に広がり、江戸庶民の一躍スターとなったのである。そして、草双紙によって大人の為だけにしかなかった文学を子供にも読めるものにしたという点に於いては児童文学界の画期的進歩といえよう。

しかし、残念な事にこれらの赤本や子供向けにかかれた黄表紙本は、＜文学書＞というよりむしろ子供の＜おもちゃ＞として捉えられていたようである。次の文章は当時の絵草子の扱いが伺えるものである。

「・・およそ小児、二、三歳の頃より、父母、外へ出て家に帰れば、必ず土産みやげと求る故、世にいう人形およびさまざまのもて遊びを、その度に帰りてつかわす。世上皆同じ。そのみやげをつかわすに、二、三度に一度は、何にてもあれ、世にいう絵草子を求めて帰りてつかわす。もちろん小児の事なれば、破りもする汚しもする。それに頓着なく、他のもてあそびと同じく、打ち委せ置くなり。」(注7)一方作る側としても、中には葛飾北斎が絵をつけた『桃太郎発端脱話』などもあるが、大部分のものが無名の浮世絵師たちのアルバイトとして作画されたものであった。

このように江戸期における草双紙類は、庶民生活の向上化・安定化に伴ってあざやかにその華を開き、子供が専有できた初めての絵本としての位置を占めるものになったといえるが、残念ながらそれを作る側もまた与える側も、子供の人格を尊重するという認識をもっていたとはいえなかった。

〔2〕明治期に於ける桃太郎

明治維新によって近代化への道を歩みはじめた日本は、海外の文化に接触することで様々な影響を受けることになる。児童文学の領域においても、巌谷小波がグリム童話やイソップ、アンデルセンの物語を通して、児童の心情に特殊性を見いだし、子供のための文学の必要性を世間に問いかけはじめた。また、印刷技術の進歩により大量生産が可能となり児童図書の普及をうながす要因ともなった。

児童文芸は、文明開化の後も童幼子女の玩弄物として軽んじられ

資料１ ▶
「桃太郎昔日記」
北尾政美（画）

資料２
▼「桃太郎」（M27年）
日本昔噺シリーズ
巌谷小波

▲「桃太郎島めぐり」　資料３

▲ナカニシヤ　日本一ノ画噺
「イッスンボウシ」

ており、又教育界においても物語の空想を単なる「うそ」であるとした見方や、「教育性が弱いという不満」を持ち合わせた「教育教材」としてしかみられていなかった。これに対して小波は「お伽噺には一ト跨ぎに三千里を飛ぶ靴が有る、此空想に趣味を持った子供、大きくなると理学を研究して、一時間何十哩の汽鑵車を発明する。（略）之皆空想の賜物ではないか。」「お伽噺の健全なものならば、只教育に補益する許りでなく、（略）一種の精神教育を施すに至るのだ。」と反論し、おとぎばなしを立派な文学として扱い「児童文学者を文壇作家と同等」(注8)の立場にすることを目指して、児童のための読み物としての－おとぎばなし－を再編成したのである。そういった意味で明治二七年に出された『日本昔噺』シリーズの第一編にあたる「桃太郎」は、近代児童文学を形成する上での大きな一歩を踏み出したものといえるだろう。

「やがて水上の方から、一抱もあろうと思はれる、素敵滅法大きな桃が、ドンブリコツコ、スッコツコ、〈、〈、と流れて来ました。（略）すると、不思議や桃の中から、可愛らしい子供の声で、「お爺さん暫く待た！」と、云ふかと思うと其桃が、左右にさツと割れて、其中から一人の嬰児が、ヒョッコリ踊り出しました。」(注9)

言葉の易しさ・テンポのよさなどから、子供たちを喜ばせよう・楽しませようといった小波の意識を強く感じる事ができる。また小波はこの本を作るにあたり、当時外国人へのおみやげとして作成された木版多彩色絵本「ちりめん本」の影響を強く受けており、表紙の絵などは今までの赤本とは違った、繊細で写実的な画風となっている。〔資料2〕このように小波は硯友社特有の美文調による凝った文体や表現方法を駆使して子供たちの夢を育て、児童文学の向上化に努めたのである。しかしながら、封建的遺制を温存した絶対主義天皇制を軸として、明治維新・富国強兵政策・教育勅語の発布などが行われた時代の風潮・要請に逆らう事ができずに、その流れを受け入れてしまった部分もこの作品には多く見受けられる。例えば、桃太郎が桃から生まれる場面で「（驚く爺婆に対して）『イヤ驚くまい驚くまい、私は決して怪しいものではない。実は天津神様から御命を蒙って降ったもの』とし、桃太郎を天津神の申し子と設定している点や、鬼退治する理由を「其鬼心邪にして、我皇神の皇化にしたがわず、（中略）世にも憎き奴に御座りますれば、私只今より出陣致し、彼奴を一挫に取て抑え、貯え置ける宝の数々、残らず奪い取て立ち返る所存。』とし、又鬼が島に攻め入る時も、「天つ神の御使、大日本の桃太郎将軍』と名乗り、天皇の名において鬼を征伐する皇国の子桃太郎像をはっきりと打ちだしている点、また今までは単なる力持ちだけだった桃太郎を「其風姿の麗しさ、其心根の勇ましさ・おまけに其力の強さ。実に鋳型に穿めた様な天晴れ豪傑。」と智・仁・勇を備えた少年武士像にしている点、雉子、犬たちをお供にする場面で「日本一の黍団子だから、一つはやれぬが半分やろう」といっており、団子を丸ごと一つ食べられる日本一の者は自分一人だけであって、動物たちは結局家来でしかないのだということを間接的に表現している部分などである。このように小波は児童文学への信念や夢を明確にもちながらも、それとは裏腹の社会的道徳にしばられた教育的要素・帝国主義的要素の濃い桃太郎をつくり上げ、このイメージを定着させる出発点となってしまったのである。

次に明治期の桃太郎絵本の主だったものについて簡単に触れてみると、草双紙類の桃太郎は江戸時代に比べ脚色化が更に強まり、娯

楽的なおもしろさにはしりがちであった。販売利潤が薄いため書店でなく駄菓子屋などでしか売れず、児童文化的・教育的価値はあまり高いものとはいえなくなった。この時代の桃太郎は皆歌舞伎役者のような顔をしておりなかなか面白いものである。〔資料3〕また明治後半になると、明治期の漫画ともいえるポンチ絵が流行する。なかでも『日露ぽんち・桃太郎のロスキー征伐』(注11)などからは帝国主義へと突進していく日本の姿が浮かび上がってくる。

〔3〕大正期に於ける桃太郎

日露戦争後、日本は帝国主義的な発展をとげると同時に労働運動・社会主義運動への激しい弾圧がなされていた。この状態の下で若い作家たちは、やりきれない現実から目をそらし無知で感覚的で従順な子供の世界に逃避することで夢幻的な美を追求しようとする動きが現われた。この傾向はその後「子供の純性を保全開発するために(注12)」つくられた雑誌『赤い鳥』の出現によって童心主義として大きく花開いたのである。

山へゆくのはお爺さん、
川へと下るのはお婆さん。
山では芝刈る鉈の音、
川では桃呼ぶ小手まねき。
むかしのむかしはなつかしい
いつでも青空、日和鳥。
(北原白秋　「むかし噺」(注13))

まぶしくひかる海のなみ。むかしむかしでありました(略)ももたろう、おともの犬とさるときじ、ならんでいくと足あとが、すなじの上につきました。ももたろうは、ちからもち、手も足もふとっていました。それでしたから、足あとがたいらなすなじにはっきりとついていました。(略)すなじの上の足あとは、そういつまでものこっていません。なみがさらさらよせてきて、すなをあらうと、足あとはしぜんにきえてしまいました。
(浜田広介　『ももたろうの足あと』(注14))

どちらも小波の帝国主義的な姿は全く影をひそめ、元気で健康なかわいい桃太郎が描かれている。北原白秋は、日本人の心を打つ言葉を厳選し、それを綴ることで日本の心のふるさとをうたいあげ、浜田広介は絵画的な描写方法を用いることで、桃太郎ばなしにさわやかさ・あたたかさ・人間らしさを含んだ芸術性の高い作品をつくり上げた。どちらも、明治期の極楽本位・教訓本位で書かれた御伽噺から、さまざまなニュアンスで思想性というものを付加させたという点では近代的児童文学への大きな前進を遂げたといってよかろう。しかしこの二作品には、昔話が本質的に持ち合わせている人間の「希望」や「欲」といった面が全く含まれておらず、あくまでも桃太郎話を利用した郷愁の心が強い印象として残ってしまうのである。ここに描かれている夕焼けのようにおだやかで、雀のようにかわいらしい子供像は果して現実の子供にぴったりあてはめる事ができるのであろうか……。人は過ぎ去った日々の思い出は、良い部分のみをイメージ的に覚えているものだ。白秋や広介は、こうした大人の目からみた子供時代を描いたのであって、必ずしも現実の子供たちの心に合致した作品だったとはいえなかったのではなかろうか。そこにリアリティーの欠如といった指摘があるといえよう。

絵本についても児童文学の童心主義という流れにそって童顔の桃太郎が急速に増えていった。江戸・明治時代に十五歳位の少年として描かれていた桃太郎は、大正・昭和に入るにつれどんどん低年齢化していき、二、三歳にしかみえない桃太郎が多く出現した。この桃太郎の低年齢化と共に、犬・猿・雉子などもキャラクター化してゆき話も省略化していく傾向がみられた。このカワイラシイだけの桃太郎絵本は、昭和五十年代位までよく見受けられた傾向である。このような童顔桃太郎絵本が氾濫する中で、一方では日本絵本史の金字塔の一つともいえる素晴らしい絵本が誕生した。「ナカニシヤ日本一ノ画噺」シリーズである。これは巌谷小波と当時の絵本界に大きな影響を与えた出版社・中西屋が協力して刊行したもので、欧米絵本の影響がうかがえるシルエット画像は、七五調の短く・歯切れの良い文章と共に絶大な効果をもたらしている。製作者の絵本にたいする情熱、子供にたいする愛情、優しさが凝縮されて表れている素晴らしい絵本である。〔資料4〕

〔4〕戦時下の桃太郎

「児童読物改善に関する指導要項」（昭和一三年）の影響によって赤本が自粛した為に明治・大正期に比べると桃太郎を題材にした本の出版は急激な減少をみせたが、それと入れ違うかの様にして、教科書には桃太郎が必ず現われるようになった。もともと武勇の子として描かれてきた桃太郎は、「軍国主義の寵児」として国家に利用されるようになったのである。

「小學國語讀本」－通称サクラ読本（昭和八年から使用）では、構成的には伝承の桃太郎話を標準化しただけのものの様にみえる。『小學國語讀本綜合研究　巻12』(注15)では、井上赳氏が「小が大に對する勝利」と犬・雉子・猿たちが団子をもらって家来になる部分の「反復」にこの童話の重要な要素があるとし、また同書で飯田廣太郎氏は、桃太郎は「日本の子供の心に建てられた、永遠の記念像」なのであるから、「児童の心深く刻まれた祖母や母の物語を、文字の世界に建設して行く喜びを味得させる」のが桃太郎教材指導の意義であるとしている。

しかしこのような桃太郎教材の意義を述べた後に、その物語の解釈として次のように示しているのだ。

〔フタリ　ハ、オダンゴ　ヲ　コシラエテ　ヤリマシタ。〕－兵糧の用意である。それが日本一のキビダンゴであるといふこともこの話に新鮮な趣を興えてゐる。

〔サル　ハ、スルスル　ト　モン　ヲ　ノボッテ、中　ヘハイリマシタ。サウシテ　モン　ノ　ト　ヲ　アケマシタ。〕－障礙を除去し、進軍を容易ならしめる點に於て、工兵隊の任務をなしたものか。

〔キジ　ハ、スバヤク　トビマハッテ、オニ　ノ　目　ヲ　ツツキマシタ。〕－飛行機の爆弾投下であり、毒ガス撒下である。

〔モウ、ケッシテ　人　ヲ　クルシメタリ、モノ　ヲ　トッタリ　イタシマセン、イノチ　ダケハ　オタスケ　クダサイ。〕－モモタラウの拳が膺懲の軍であり正義の師であることは、この一言によって明らかにせられてゐる。

この様な桃太郎話の解釈のしかたは、つぎの「ヨミカタ」にも受け継がれており、一九四一年に出された教材解釈の目標の場においては、「桃太郎の鬼ケ島退治は、単なる征服欲の所為ではなく、鬼

をして「コレカラハ、人ヲクルシメタリ、モノヲ　トッタリ　イタシマセン。」と誓はせる正義の拳である点において、いまわれわれの祖国が戦ってゐる大きな戦争の意義と、直接につながってゐる。大東亜戦争は、東亜の人々を苦しめ、物をしぼりとってきた人々に対する膺懲の軍であり、鬼退治の精神と全く揆を一にするといふことができる。かうして、われわれは、この童話に具現されてゐる民族の精神を、今こそ身をもって実証しつつある。」(注16)と露骨なまでに太平洋戦争と桃太郎教材の関係を示しているのだ。

このようにサクラ読本での桃太郎話自体はオーソドックスな形をしてはいるが、以上のような解釈にそって桃太郎話が読み進められていたという事は、やはりここでも正しい桃太郎話の理解はされていないといえる。いや、正しい理解どころか、桃太郎という日本で最も知られている話を利用して、日本における戦争を正当化し、桃太郎がやってきた鬼征伐も今日本が行っている戦争も全て侵略や干渉といったものではない、正義の戦いなのだといった帝国主義的教育を行っていたのである。先にも述べたが、何故この桃太郎が日本で一番有名な話になったのかといえば、それは親の愛情をたっぷり含みながら代々語られてきたからである。だからこそ、北原白秋をはじめとする多くの作家たちが、この話に郷愁を感じたのであろう。そして、ここにこそ昔話民話の存在意義があるのだと私は思うのだ。だが残念なことに日本帝国の手によって、親の愛情の部分がそっくり戦争のために利用され、全く異質なものへとすり替えられてしまったのである。

時代に振り回され、都合のいいようにもて遊ばれた桃太郎の運命をみてくると、どうしても日本の児童文学は、子供そっちのけの大人中心のものの様に感じてしまう。このことは、その時代が貧しければ貧しいほど、現われてくる現象だ。それは、赤本しかり、国定教科書しかりである。そして、日本はこういった風潮、流行にひどく弱い性質をもっている。赤本が流行れば赤本を大量につくり、童顔のかわいいだけの絵本がはやれば、三頭身の主人公が表紙を飾った絵本を皆争うようにしてつくる。それらは、どれもこれも同じ方向を向いており、同じ流行を追っている。今よりも、もっと良いものを作ろう、もっと個性的なものを作ろうといった意欲が一部の作者を除いては、感じることができず、皆とても低いレベルで競争をしているのだ。

現在、子供の数が減少し、子供一人当りにかけるお金は増える一方である。

そんなところに目を付けたのが企業であり、いままで出版とは何の関わりも持っていなかった会社までもが、児童文学界、とくに絵本界に進出してきたのだ。彼らは、新しく作らなくて済み、頭を使わなくてすむ翻訳本や昔話をターゲットにして、安易な文化のバラ売りをしている。子供のためでなく、自分のためにだ。これでは、また小波たちが必死に闘って、歩んできた道程を後戻りしてしまっているのと同じである。

児童のための文学・絵本を作る側も、そして与える側の姿勢にも、現在イエローフラッグが大きく振られている状態といえる。そこで、次章では優れた昔話絵本とはどんなものなのかを考えまとめとしてみたい。

二、よい昔話絵本の条件

よい昔話絵本の条件とは、まず第一に伝承されてきたものの本質－「何故これは多くの人々に愛されてきたのか？」「多くの人を長い間引きつけてきたものはなにであったのか？」を考え、その昔話のテーマを明確に捉えている事が挙げられる。

桃太郎話のテーマでいうならば、『ももの子たろう』(注17)の作者・大川悦生が考えるように、桃から生まれた桃太郎が、お爺さんとお婆さんの暖かい《愛情》によってずんずん大きくなり、老父母の愛情の象徴たる黍団子をもって、人々を困らせている鬼を退治に出かける。桃太郎の《勇気》ある姿にあると思う。

ここで決して間違ってはいけないのは、この話のテーマが鬼を退治して宝物を分捕ってくる所にあるわけでも、天皇の名のもとに悪を退治する事にあるのでもないのだ。

この〝話のテーマを的確に捉える〟ことがされていないと、これまでみてきたような悲惨な事態が起こってしまうのだ。〝テーマを明確に捉え、表現すること〟－これは昔話絵本にいえることだけでなく、しかけ絵本・写真絵本・科学絵本をはじめとした絵本制作全体にいえる基本的条件といえよう。このことがきちんと出来たとき、絵本は初めて「玩具」からの脱出ができるのではなかろうか。

第二に、絵と文に一体感があり、かつ絵に語りかける力を持っていることが挙げられる。

近年・昔話・翻訳絵本の出版が急激に増加したことは述べたが、ひどいものになると一つの「文学作品」として完成しているものに、そのまま絵を付けている名作童話絵本などがあり、このような作品は、絵にも文にも余計なものや、会わないものが沢山出てきてしまって見づらいものになってしまっている。絵本に要求される絵とは、松居直氏(注18)が指摘するように文章を説明するための「挿絵」とは全く違い、また一枚で全てのテーマを語ってしまう「絵画」とも違うものなのだ。絵本の絵とは、文章と共存する事が大前提とされており、かつ、文では表現しづらいところを視覚的なイメージによって補うことで、その作品の想像性を広げるものでなくてはならない。そして、読者を絵本の世界にひっぱり込むような「絵の力」－絵本が読者に語りかける力がある事も良い絵本の必要条件である。

更にもう一点つけ加えたいのは、絵の中の文章の配置の仕方である。文と絵が同時に楽しめるよう、リズム良く文章が読めるような文章の配置に、制作者たちはもっと気をつかっても良いのではなかろうか。そういった観点からみると、松居直・赤羽末吉の「ももたろう」は絵と文の息があった素晴らしい絵本に仕上がっている。

第三に、言葉の一つ一つが大切にされている事である。

増村王子氏(注19)によると、絵本に触れることの多い子供たち－特に2歳から4歳にかけては、語彙が形成される時期でもあり、音韻・語感・言葉のリズムなどに非常に敏感であり、言葉の感覚が大変鋭敏になっているということである。とすると、この時期に与える絵本の言葉は、やはり普通の文学のものより、より神経を使って厳選しなくてはならない。そして、絵本を読むのが子供だけではない現代に於いても、先にあげた「絵と文の共存」という観点から、これからの絵本の文章は、絵本用に書き下ろす必要があると思うのだ。

私の大好きな、松谷みよ子や斎藤隆介の絵本をみてみると、非常

に絵本のなかでいきいきとしている言葉に巡り合う。

八郎はよ、心のやさし山男であったから、男わらしがめんこくってよ、

「泣ぐな、泣ぐな、おらが遊んでやるがらな」って言ったども、

そのまめみてえだ男わらし、あっちでおおぜいして、土手きずいて大さわぎしている、おとう、おっかあのほうを見てはわいわい、白い長い歯をむいて、えへえへわらう暗い海見てはわいわい、泣いて泣きやまねえので、八郎もよ、おっきなおっきな山男だったども、つい、かなしくなってせ、石うすみてえだなみだこ一つぶ、ぽろーりとこぼしてな、

「んだば、わかった。待ってれ！」って言ったと。（斉藤隆介『八郎』(注20)）

これらは決して説明的な文章ではなく、この言葉と絵を重ね合わせることで、物語の想像の世界が倍増され、文や絵に動きが出てくるのである。これこそが、他の文学とは違った「絵本用の言葉」、または絵本に最も適した言葉といえるのではないだろうか。

又、言葉も絵と同様に、相手に語りかけるような暖かさ、力強さが必要である。

そこには、やはり方言の問題が含まれていよう。基本的に、その地方で伝承されてきた話は、その地方の言葉で語られる（書かれる）べきものである。現在、テレビもラジオも教科書も、あらゆる情報の伝達に用いられる言葉が、東京を中心に使われている言葉である。だが、この標準語には、方言がもつ、ある種の泥くささ、生活のにおいというものが感じられないのだ。方言とは、決して失われてはならないものであろうし、少ない文章量で、想像力を高める適切な文章を作らなければならない絵本の世界において、地方の言葉はもっと見直されるべきものであろう。

第四に、話の構成はシンプルであるが、その中にあでやかさ・超越性・神秘性をもっているもの。

マックス・リューティ(注21)によれば「本来の昔話は、筋・人事・事物がはっきりしており、心中や外見の様子など詳しく説明していない」シンプルかつ明瞭なものであったのだ。これこそが、長年子供たちに親しまれてきた要因なのであるから、不必要にいろいろな場面をつけ加えたり、話を複雑にしてはならないと思う。

しかし、それと同時にシンプルな構成の話の中にも、あでやかさや超越性といったものが含まれていなくてはならない。民話は、やはり民衆の夢や願望によって語り継がれてきたのであるから、その本質を貫くためにも、人を引き付ける何らかの要素を持っていなくてはならない様に思う。

第五に、一時的な流行によるものでないもの。

私は、良い昔話絵本に挙げる最後の条件として、一時的なもの・流行によるものではないものとしたい。

最近の傾向として、とても安い値段で売られているアニメ昔話絵本や、ドッカーンといった擬音語の多く使われている絵本が流行っている事は先にも述べてきた。

さて、今回絵本の研究をするにあたり、私は図書館の児童室に通いつめ、自分が幼い頃に夢中になって読んだ絵本などに遭遇するという事が多々あった。表紙や題名だけは覚えている絵本たちのページをバラバラとめくってみると、不思議とその世界に引き込まれ熱中してしまっていた。

では、今流行しているアニメ絵本などを二十年後に再び読んだら、その人は熱中できるであろうか・・答えはできないであろう。

昔話とは、日本人の長い歴史の中に培われてきた、人の生きざま、願い、哀しみが凝縮されて出来上がったものである。このような素晴らしいものを安易な発想や一時的な流行、出版社の利潤主義によって変質させてほしくはないのである。日本の絵本史は、まだスタートをきったばかりの浅いものである。このことは同時に、今後の絵本界が進むべき道・可能性が山のようにあり、また一方では今まで人々が長い年月をかけて育て、大切にしてきたものを破壊してしまう危険性も含んでいるということだ。これは人間の文化が進んでいく為にある程度仕方のないことかもしれない。しかし、物事の本質、本当に私達にとって大切なものは何なのかを一時的な流行に惑わされ見失わないように努力をしていく必要性が絵本を作る側にも、またそれを選択する側にもあるのではないだろうか。

注1　刊年未詳、西村出版
注2　『桃太郎昔話』鳥居清満・画（鱗形屋）安永2年
注3　刊年未詳
注4　『桃太郎一代記』北尾政美・画（物村田屋板）天明1年
注5　『桃太郎像の変容』滑川道夫（東京書籍）1981年刊行
注6　『桃太郎昔日記』北尾政美・画　寛政1年
注7　『授業論』北村北海（山住正己他編）『子育ての書2』平凡社1976より
注8　『日本の児童文学　1』菅忠道（大月書店）1976年第5版より
注9　『日本児童文学体系』巌谷小波（ほるぷ社）1977年
注10　ちりめん本〝Peachling〟などを代表に、繊細かつ丁寧な線と豊かな色彩によってつくられたこの本は当時の作家や出版社に大きな衝撃を与えた。
注11　『日露ぽんち・桃太郎のロスキー成敗』いしはら　ばんがく作明治38年発行
注12　『日本児童文学概論』（東京書籍）1981年
注13　『桃太郎の運命』鳥越信（NHKブックス）
注14　『浜田廣介全集　四』浜田廣介（集英社）1975年刊行
注15　『小學國語讀本綜合研究巻十二』国語教育学会編（岩波書店）
注16　『国民科国語の指導ヨミカタ1』（岩波書店）
注17　『ものの子たろう』大川悦性・箕田源二郎　1967年発行
注18　『絵本とは何か』松居直（日本エディタースクール出版部）
注19　『子どもの本棚22　'77』
注20　『八郎』斉藤隆介・作　滝平二郎・画（福音館書店）1967年
注21　『昔話の本質』マックス・リューティ（福音館書籍）1974年

資料1　「桃太郎昔日記」北尾政美（画）
資料2　「桃太郎」（M27）日本昔の新シリーズ　巌谷小波「桃太郎島めぐり」
資料3　ナカニシヤ　日本一ノ画の新「イッスンボウシ」
資料4　ナカニシヤ　日本一ノ画の噺「モモタラウ」
巌谷小波（文）、小林鐘吉（絵）

（さかの　ようこ・一九九四年卒　関口ゼミ）